ジブチ国沿岸警備隊能力拡充プロジェクト

日本海難防止協会　常務理事　鏡 信春

幣協会は国際協力機構（JICA）殿からの委託を受け、「ジブチ国沿岸警備隊能力拡充プロジェクト」に参画しております。本稿ではその概要をお伝えしたいと思います。

ジブチ共和国はアフリカの東岸、アデン湾に面する国です。総面積は 2 万 3 千平方キロ、東京・神奈川・山梨・埼玉・千葉・茨城を包含するエリア、といったイメージです。同国の沿岸警備隊（Djibouti Coast Guard（DCG）／Garde-côtes Djibouti）は、2010 年に海軍から独立し、設備運輸省下の組織となりました。

地中海とアラビア海を結ぶアデン湾に面するジブチ。周辺海域では海賊が頻繁に民間船舶を襲撃しており、これを阻止するためジブチには日本を含む各国の海軍基地が置かれ、海賊対策に当たっています。ジブチがこのような拠点になった理由は、地勢的な理由に加え、政治や治安が安定していることも大きいでしょう。

このような状況下、ジブチの海上保安機関であるジブチ沿岸警備隊の能力強化が重要視され、JICA による本プロジェクトが 2013 年から開始されました。今まで、JICA から長期派遣専門家による支援、海上保安庁から短期派遣専門家による能力強化、20m 型巡視艇の供与などが行われてきました。現在は同プロジェクトの第 3 フェーズで、これまでの支援と並行して、DCG に対し①航海訓練、②船艇機関維持管理、③第三国研修を行うこととし、日本海難防止協会がこれらの業務を JICA 殿から受託致しました。

既に就役している 20m 型巡視艇に加え、さらなる巡視艇増強に関する調査も進められており、これらの船艇を安全に運用するとともに、海上保安業務を確実に遂行するため、前記①～③の支援が急務となっているところです。

地中海とアラビア海を結ぶ海上交通の要衝
（Google Map に加筆）

日本から供与された 20m 型巡視艇
海上保安庁の 20m 型巡視艇とほぼ同形

JICA 殿とは昨年度に契約を結びました。契約締結後、早期にジブチに渡航し具体的な支援内容を詰める予定でしたが、コロナ禍のため延び延びとなり、いよいよ本年 4 月に初渡航を計画していたのですが、その直前になってジブチ国内での罹患者数が急激に増加したため延期。6 月になってやっと渡航することができました。

具体的には、私を含む 3 人のチームメンバーが 6 月 17 日から 7 月 13 日までジブチに滞在し、DCG 側と、まさに「顔を突き合わせて」の協議を行いました。またそれに加え、エスカル（DCG 本部があり、20m 型巡視艇の基地となっている。）、ポート･ペシュ（DCG の船艇整備基地がある。JICA 長期派遣専門家の事務所があり、ここを起点に DCG との調整に当たっている。）、ドラレ（DCG の訓練施設があり、新入隊員向けの教育訓練が行われている。彼らのための宿泊施設も併設されている。）を見学し、我々がこれから行う訓練の事前調査を実施しました。

ちなみにエスカルはフランス語で「寄港地」、ポート・ペシュは「漁港」という意味。エスカルの DCG 基地内（！）にはフェリー桟橋があり、ポート・ペシュの DCG 基地は漁港の中にあります。ドラレは地名（固有名詞）のようです。

「海と安全」前々号のコラムをご覧になった方はご記憶かと思いますが、モーリシャスでは入国後、政府指定施設で 2 週間の強制隔離がありましたが、ジブチでは強制隔離はなく、JICA ルールによる 5 日間の自主隔離を経て現地活動を行うことができました。

DCG 本部（通称エスカル）
DCG の建物は全て赤と黄で塗り分けられている

DCG 基地内にあるフェリー桟橋
このフェリーも日本からの支援

ジブチ渡航前､JICA 殿にも入ってもらい DCG とのウェブ会議を何回か開催し､プロジェクトの進め方について話し合いを行ったのですが、例えば、第三国研修では何人の研修生を教育機関に送るか、とか、船外機の研修をどのレベルに設定するか、など、なかなか結論に至らず膠着状態に陥っていました。相手側はフランス語ですので日仏の通訳に入ってもらうことに加え、ネットの通信環境も良くはなく、でも一番障害だったのは、フェーストゥーフェースのミーティング無しでのいきなりのウェブ会議でしたので、なかなか相手との意思疎通ができず、このため今回のジブチ渡航前は胃が痛くなる思いでした。

実際 DCG との初会合はとても緊張しましたが、やはり直接顔を合わせて話し合うと相手の意図がよく分かり、徐々に話が纏っていくようになりました。会話も英語で、ニュアンスがよく伝わらないときだけ英仏の通訳を頼る感じで、対話のタイムラグも最小限になりました。また、私は海上保安庁 OB、同行した当協会、尾﨑国際室長は現役海上保安官（当協会には研究出向中）、補強として参加した大前氏（前回、モーリシャスでご一緒した方です）は商船大出身のキャプテン。同じ海上保安官（沿岸警備隊員）同士、同じ船乗り同士といった面も、お互いの意図を理解するのにとても役立ちました。

DCG との初会合
正面がプロジェクトマネージャー・アダワ副長官

実際に巡視艇を出港させての確認
尾﨑室長がその状況を撮影記録している

DCG との打ち合わせも終盤に差し掛かった頃、設備運輸省から DCG に出向し、アダワ副長官の下で折衝実務を担当していたアイナン氏が、「なんでこんな時期にジブチに来たんだ？」ということを言い出しました。彼はタフネゴシエーターで、ウェブ会議でも彼のせい（？）で何回も話が座礁してしまいました。実は我々が訪れた 7 月はジブチで最も暑い季節、ハムシン（砂嵐）の季節でもあります。最初はドキッとしましたが、これは彼の冗談（半分は本気）で、「ジブチは暑い季節と 2 倍暑い季節しかないんだ」「その 2 倍暑い季節に来るんだから」と言って皆を笑わせました。冗談が出てくれば合意までまだ道のりがあったとしても暗い夜道に光明、ギスギスした感じがなくなり、打ち解けた雰囲気で会議を進めることができます。

そんなこんなで、決して平坦な道のりではありませんでしたが、DCG、当協会、両者が合意文書に署名して（当然 JICA 殿も内容は了解）ミッションを終える状況となりました。ところがその段階でジブチ側から、DCG と JICA の間でコロナ対策支援に関する署名式典（サイニングセレモニー）があるので、協会との署名もそれと一緒にやろう、という提案がありました。DCG は病院を持っており、医師も 8 人が在籍しています。救急車も持っており、業務分野では日本の海上保安庁よりも範囲が広いと言えます。今回の JICA によるコロナ対策支援は、このような DCG であることからできた案件でした。

DCG・JICA 間の署名
DCG ワイス長官、JICA ジブチ金田所長

EDITION N° 134
Mardi 13 Juillet 2021

La Nation

Garde-Côtes djiboutienne et JICA

Main dans la main pour lutter contre le Covid-19

La Direction Générale de la Garde-Côtes Djiboutienne a accueillie dans la journée du 11 juillet 2021 une cérémonie de signature entre la Garde-Côtes Djiboutienne et l'Agence Japonaise de Coopération Internationale (JICA) du procès-verbal de discussion sur le *« Projet de développement de capacité en matiére de prévention d'infection et d'intervention d'urgence de la Garde-Côtes sous l'influence du Covid-19 »*. Cette cérémonie s'est déroulée en présence du Colonel Wais Omar Bogoreh – Commandant de la Garde-Côtes – et de M. Kaneda Masayuki, le Représentant Résident de la JICA à Djibouti. Dans le cadre de ce projet, la Garde-Côtes Djiboutienne va réceptionner un don constitué de 3 ambulances et 3 camions-citernes afin de renforcer les capacités d'intervention d'urgence de la Garde-Côtes qui intervient sur l'ensemble du domaine maritime. Dans une allocution prononcée lors de cette cérémonie, le représentant de la JICA a réaffirmé la disponibilité du Japon dans la lutte contre la pandémie du Covid-19 et a tenu à saluer les succès éclatants de la République de Djibouti qui a réussi à maitriser cette pandémie.

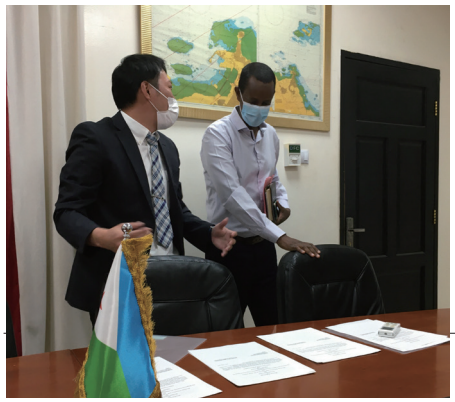
Pour sa part, le Colonel Bogoreh a tenu à souligner que ce projet est une nouvelle démonstration de l'excellence des relations entre le Japon et la République de Djibouti en général et entre la Garde-Côtes et la JICA en particulier.

La concrétisation de ce projet s'ajoute aux autres réalisations en formations, dons d'équipements et exercices conjoints menée par la Garde-Côtes avec ses partenaires japonais.

DCG・日本海難防止協会間の署名
DCG ワイス長官、鏡

JICA による支援が地元紙で紹介されました

こうして次回 10 月の再会を期して今回のミッションを終了することができました。今回の成果は今後の訓練内容に関する合意が得られたことですが、お互いの気心が分かり、目的意識が共有されたことも大きな収穫でした。次回の渡航が楽しみになってきました。

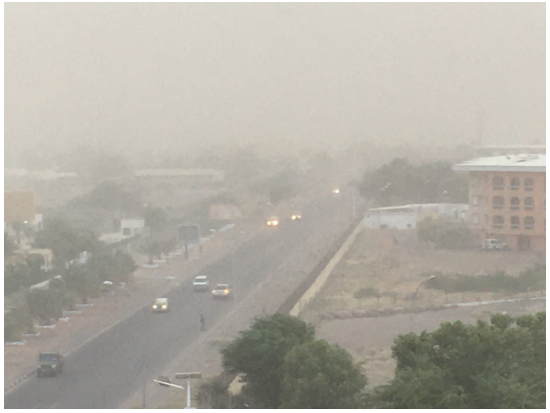


署名式典の準備
尾﨑室長とタフネゴシエーター・アイナン氏

署名式典の後で記念撮影
尾﨑室長、アダワ副長官、鏡

ハムシンは砂嵐のことで、ジブチでは陸から吹く強い風によって運ばれた砂塵で視界が低下します。映画にでてくるような「迫りくる砂嵐」とはイメージが違いますが、外にいると眼がコリコリ、口の中はジャリジャリしてきます。砂にはバイ菌も含まれており、ハムシンが起きると防塵眼鏡をして外に出ないと眼に悪いです。宿泊所（自炊のためアパートを借りました）の室内にも砂が入ってくるのには閉口しました。

とある日、アパートの外に出てみるとサウナに入ったような感じの熱気です。持参した温度計で測定したところ 47.5 度（地面から 1m 程度の高さ、日陰で観測）を記録しました。ただし、ご覧のとおり湿度が低いので、日本の夏よりは快適かもしれません。とにかく、DCG との訓練は「2 倍暑い季節」は避けたほうが良さそうです。



ハムシン

左の写真とは別の日に

帰国時もひと苦労ありました。我々がジブチ入りしてから、ジブチ在住者はコロナのワクチンを接種しないと出国できない、という大統領令が発せられたのです。我々のような短期滞在者がこれに該当するか不明であったため、念のため「接種免除証明書」という書類を現地で取得しました。また、出国前に現地で PCR 検査を受けたのですが、ジブチ政府発行の「陰性証明書」では日本入国時の検疫を通過できないため、ジブチの日本大使館から「転記証明書」という書類を頂き、いよいよ出国することになりました。

ジブチ～イスタンブール便は、ジブチの南、ソマリアの首都、モガディシュ始発・ジブチ経由・イスタンブール行き、という便で、これが 3 時間の遅延。経由地のイスタンブールでは 6 時間の余裕があったから良かったものの、冷や汗ものでした。しかも遅延のアナウンスはまったくなく、なかなか搭乗が開始されないのでトルコ航空のサイトを確認してやっと遅延が判明した次第。ソーシャルディスタンス完全無視の待合室で長時間待たされる羽目になりました。ジブチ空港を利用する際は出発遅延に備え、①空港内には WiFi がないのでネットに繋がる手段を持っておく、②空港内の売店で紙幣で飲み物を買おうとすると釣銭がないとのことで断られるのでコインを残しておく、ことが必要という教訓でした。羽田向けの飛行機がイスタンブールを離陸した際は本当にホッとしました。

ジブチに滞在し DCG 側と本プロジェクトの業務調整をしてくれ、今までのウェブ会議には毎回参加されていた西尾専門家が、今回のジブチ訪問時には不在でした。急病のため、医療機関が発達しているケニアに緊急搬送され、懸命の看病が行われましたが、我々のジブチ入り 6 月 17 日を目前とした 6 月 6 日、アフリカの地において逝去されたのです。

ジブチで一緒にお仕事ができるのを楽しみにしていたのに、とても残念でした。また、DCG 側と調整を行う上で頼みの綱でしたから、西尾専門家の不在は我々にとって大きな痛手でした。西尾専門家はジブチに単身赴任していましたので、日本に残してきたご家族のことを思うと忍びないです。

JICA 長期派遣専門家は日本で身体検査を受けて現地に赴任するのですが、医療機関に不安がある地ではこのような危険もあるのです。

以下はジブチ沿岸警備隊のフェイスブック、ワイス長官の西尾専門家への哀悼文です。今回 DCG との話がうまく纏まったのは、ひとえに西尾専門家が長年に渡り DCG と日本側との間で良い関係を築いてきたことのお陰に他なりません。この場をお借りしまして、西尾専門家の今までのご尽力に深く感謝するとともに、謹んで哀悼の意を表します。

日本海難防止協会　常務理事　鏡信春（元フィリピン沿岸警備隊派遣･JICA 長期派遣専門家）

Garde-Côtes Djiboutienne
お気に入り · 6月8日 ·

C'est avec consternation et une grande tristesse que la Garde-Côtes Djiboutienne a appris le décès de Mr NISHIO SHINYA survenu dans la soirée du 06 juin 2021 au Kenya.

Feu NISHIO SHINYA était le coordinateur du Projet de renforcement des capacités opérationnelles liant la Garde-Côtes Djiboutienne et l'Agence Japonaise de Coopération Internationale (JICA) depuis deux ans.

Le défunt avait déjà été impliqué en qualité de volontaire de la JICA dans d'autres projets à Djibouti avant son affectation à ce projet.

Doté d'une personnalité attachante, le défunt était très apprécié pour sa disponibilité de tous les instants, son professionnalisme et son dévouement à la bonne exécution de ce projet vital.

Le Colonel WAIS OMAR BOGOREH – Commandant de la Garde-Côtes Djiboutienne – tient à adresser en son nom personnel et au nom de l'ensemble du personnel ses plus sincères condoléances et exprimé sa sympathie en ces moments douloureux à la famille et aux proches du défunt.

Nous étendons nos condoléances les plus attristées à l'Ambassadeur du Japon à Djibouti, au Représentant et aux personnels et volontaires du Bureau du JICA Djibouti ainsi qu'à la grande famille internationale de la JICA.

あなた、他39人　　コメント2件 シェア16件